

『パストン家書簡集』と暴力について

手 塚 喬 介

15 世紀中葉のイングランドでは少なくとも形式上、司法制度は整備されたように見える。教会法に基づきローマ教皇庁を最高機関とする宗教裁判所は、聖職者以外の者に対しても、婚姻、遺言と人的財産相続、嫡出、名誉毀損、誓約違反に関する訴訟を扱ったし（田中 287）、他方、世俗一般に関しては、14 世紀に制度化された治安判事による小治安裁判所、四季裁判所（松村・富田 383）に加え、専門裁判官による民訴裁判所、財務裁判所、王座裁判所などのコモン・ロー裁判所（松村・富田 157）と、衡平法に基づく大法官裁判所があった（松村・富田 236）。オクスフォードとケンブリッジの両大学ではローマ法と教会法が法学研究の中心であったから、コモン・ローの教育研究はロンドンの法学院で行なわれ、司法制度を支える実務家を育成した（Myers 144）。本来は別種の実務家の集合体であった法学予備院は、法的文書の書き方などを教えるようになっていた（Keen 234）。ウィリアム・パストンの妻アグネスは、ロンドンの法学予備院クリフォード・インで学ぶ次男エドモンドに宛てた手紙の冒頭で法学の重要性を思い起こさせている。

To myn welbelouid sone.

I grete yow wel, and avyse yow to thynkke onis of the daie of yowre fadris counseyle to lerne the lawe; for he seyde manie tymis that ho so euer schuld dwelle at Paston schulde have nede to conne defende hymselfe.¹⁾ (*Paston I.* 27)

「法が我が身を守る」はずのこの国の実態はどのようなものであっただ

ろうか。アグネスの上記の手紙はこの後の部分で、ウィリアム・パストンが生前に認可を受けていた道路変更がその死後、何の法的手続きも経ずこれ見よがしに境界標を抜き取られたこと、また数年にわたって請求されなかった地代が請求されるようになったことを記している。アグネスは小作農のことは「ウィリアムは偉大な人物であり、有能な法律家であった」を引用して、法律の効用を誇っているのだが、むしろ公的合意が簡単に無視されたり、法の基準が強者には甘く弱者には厳密であったことをも示しているように思われる。

ウィリアム自身、ブロムハウムの修道僧たちに宛てた書簡で3人の敵対者として、いずれも彼が代理人となって応訴した相手のジョン・ワーツ（別名パストン）、ウォルター・アスラク、ユーリアーナ・ハーバドを挙げ、この3人に対して彼自身が違法なことをした覚えはまったくなく、すべて依頼人であるお偉方や友人の問題であるのに、不当にかつ騒々しく悩まされ、非常に不安を感じているとこぼしている（*Paston I*. 7）。

ジョン・ワーツは教皇庁に上訴までしてブロムハウム小修道院長となったが、ほぼ同時期にアイルランドのコーク司教に叙任されており、それにもかかわらず小修道院長の地位にこだわるワーツは、合理主義者のウィリアムには理解しえぬ人物なのであろう。アスラクとハーバドに対してはウィリアム側が勝訴しているのだが、執拗にこのふたりは彼に対する非難を繰り返した。アスラクとは1428年ノーフォーク公の仲裁によって和解する。それに向けてウィリアムが提出した文書は彼の立場を明快に示している。長期間にわたるアスラクへの対応を記述する前に、ヘンリ6世御世第2年（1423年）受割礼日の前夜（12月31日）ノーフォークのワイトン（巡礼地リトル・ウォルシングムの北3キロ）で起きた凶悪犯罪がまず語られる。

1) *Paston Letters* からの引用においては、Davis が行なった書誌学上の表記と記号はアクセント記号を除いてすべて無視した。

Be it remembred þat where, on þe nyght next biforn þe feste of þe Circumcision of owre Lord Jesu þe secunde yeer of þe regne of Kyng Henry þe Sexte, certeyns maffaisours, felons, and brekeres of þe Kynges peas vnknowyn, to þe noumbre of iiij^{xx} and more by estimation, of malice and jmaginacion forn-thowght felonowsly þe dwellyng place of John Grys of Wyghton in Wyghton in þe shyre of Norffolk brokyn, and wyth carpenteres axes þe yates and þe dores of þe seyde place hewen, and þe seyde John Grys and hys sone and a seruauent man of hese by here bodyes tokyn and fro þe seyde dwellyng place by þe space of a myle to a peyre galwes ledden, pere hem for to have hangyd; and by-cause hem fayled ropes convenient to here felonowse purpos þe seyde John Grys, hese sone, and hys man pere felonowsly slowen and mordered in þe most horrible wyse þat euer was herd spoken of in þat cuntré. (*Paston* I. 8)

法律家の文体で手短かに述べられている犯罪の日時、場所、経緯については、幾つかの奇妙な事態がある。まず12月31日夜はクリスマス期間であり、生活苦や突発的な衝突などに起因する犯罪ならばいざ知らず、計画的殺人は異常としか言いようがない。またグライス邸に押し入ったのは80人を超す集団であり、それだけの人数を動員できる勢力が、各種の犯罪のみを目的として結成された暴力集団であるとは思えず、それがどのようなものであるのかは、あえて明言せずともこの覚書の読者ノーフォク公には見当がついたのであろう。最も奇妙なことは殺害の場所と手段である。犯行の目的は金銭や貴金属ではなく、ジョン・グライス、その子息そしてグライス家使用人の殺害であるように思われる。なぜこの集団は押し入った邸から夜間に被害者をわざわざ連れ出し、1マイルも離れた場所に立つ、地域の処刑場として使われていたらしい2基の絞首台に吊そうとしたのであろうか。しかも絞首索となるロープがなかったため、「前代未聞の恐ろしい方法」によって殺害したと記述されているが、絞首台とロープという具体的な表現とは対蹠的にきわめて抽象的である。ただしこの引用に続く部分で「切断の恐怖」への言及があり、かつこの集団が「大工の用いる

斧」を使ってグライス邸の「門や扉を切断した」とも報告されているので、「前代未聞」の方法は簡単に推測しうる。こうした奇妙な事態は、これが法的手続を経ない死刑執行であるとグライス家以外の住民に示すことがおそらく犯行集団の意図であったためと思われる。

ウィリアム・パストンに関してアスラクにかけられる嫌疑は、金品を要求する恐喝や治療を要する傷害ではなく、心理的な打撃を狙った威嚇である。その犯罪行為を効果的に記述するためには、グライス家殺人事件の残忍さ、神も「国王の平和」も恐れぬ凶悪さ、実行犯の背後に見え隠れする巨大な勢力などが明確に認識される必要があった。ウィリアム・パストンに対する威嚇が行なわれたのは、グライス家の事件から約9か月後である。アスラクとその使用人リチャード・キリングワースはヘンリ6世御世第2年8月28日、州会開催日で人出の多いノリッジ市内のトリニティ修道院教会、フランシスコ会教会、市防壁のニーダム門とウェストウィック門などに、「ウィリアム・パストンとその書記や使用人たちはジョン・グライスたちと同じ方法で殺され切断される」との文書を貼り付けた。アスラクは訴訟で負けた恨みを相手側代理人であったパストンに向けたのである。パストンは恐怖のため徒歩でも馬上でも外出ができなくなった。そのためにアスラクを訴えた。これがパストン側の説明であり、グライス殺害事件の細部、とりわけ絞首台、絞首索、そして前代未聞の恐ろしい方法での殺害という、具象と抽象を合わせた陰惨な表現が、アスラクの脅迫状の犯罪性を強く訴える仕組である。

この脅迫状の筆者がアスラクとキリングワースであると断定する証拠は提示されておらず、アスラク側から提出された文書（*Paston II*. 505-507）においてアスラクは、この脅迫に自分は関与しておらず、キリングワースが勝手に行なったと主張している。アスラクによると、当初パストンは善行保証を要求し、治安判事サー・トマス・アーピングム（アジャンクールの合戦で武勲を挙げたノリッジの名士）が認めたにもかかわらず、州奉行法廷に侵害訴訟を提起しアスラクの身柄を拘束するに至ったのである。リ

チャード・バーバーはウィリアム・パストンについて、「敵対者に対して容赦のない法律家」(Barber 17)と評しており、「偉大な人物、有能な法律家」ではあるが、恐ろしい面もあると見ている。あらゆる法律上の手段を駆使して敵対者を攻撃するウィリアムの基本的な立場は、「我が身を守る」であり、アスラクへの対応に見られる目まぐるしい動きは、アスラクの背後にあるやもしれぬ大武装集団を動員しうる勢力を恐れたからであろう。

☆

1444年ウィリアムが死去すると、まだ若く病気がちでロンドン滞在が多いジョンを軽視してか、正当な手続で入手したパストン家の不動産に対する異議が続出する。

ジョン・パストンがヘンリ6世を通して議会に提出した請願書はグreshamの荘園に関わっている。リチャード・バーバーによると(Barber 31)、詩人チョーサーの子トマスがかつて所有していたこの荘園の半分の権利を入手しうる立場にありながらそうしなかったマリNZ卿ロバート・ハンガーフォード(1431-1464)が法律家ジョン・ヘイドンとその仲間のサー・トマス・タダナムに唆され(この両名はサフォーク公の子飼いの者である)、占有する根拠のないままヘンリ6世御世26年(1448年)2月17日グreshamの荘園に侵入し占拠した。ジョン・パストンはマリNZ卿およびその代理人とその年のミカエル祭日(9月29日)まで「辞を低うして」交渉を続けたが、占拠する根拠も示されず、またマリNZ卿との面談もかなわなかったので、10月6日グresham町内に居を構えたところ、1月28日になってマリNZ卿は思いもかけぬ行動に出た。

... the xxviiiij day of Januarij last past the seid lord sent to the seid mansion a riotous peple to the nombre of a thowsand persones, with blanket bendes of a sute as riseres a-geyn your pees, arrayd in maner of werre with curesse, brigaunders, jakkes, salettes, gleyfes, bowes, arows, pavyse, gonnys, pannys with fier and teynes brennyng there-in,

long cromes to draw down howsis, ladderes, pikoyes with which thei myned down the walles, and long trees with which thei broke vp yates and dores and so came in-to the seid mansion, the wiff of your seid besechere at that tyme beyng ther-in, and xij persones with here, the which persones thei dreve oute of the seid mansion and myned down the walle of the chambre where-in the wiff of your seid besechere was, and bare here oute at the yates and cutte a-sondre the postes of the howses and lete them falle, and broke vp all the chambres and coferes with-in the seid mansion, and rifelyd and in maner of robbery bare a-wey all the stuffe, aray, and mony that your seyde besechere and his seruantes had there, on-to the valew of cc li., and part there-of sold and part there-of yaffe, and the remenaunt thei departed among them to the grete and outrageous hurt of your seid besechere; sayng opynly that if thei myght haue found there your seid besechere, and on John Damme which is of councelle with hym, and diuers oder of the seruantes of your seid besechere, thei shuld haue died. (*Paston* I. 52)

前述のグライス家殺人事件では約 80 人であった暴力集団は 1000 人の大集団となった。グライス事件と異なるのは、パストン邸を破壊し、かつ家財道具から金銭までも奪って売り払ったり、だれかに与えたり、仲間うちで山分けしたりはしたものの、マーガレット・パストンと 12 人のパストン家関係者は追い出されただけで済んだ点である。ただしジョン・パストンとその仲間のジョン・ダムなどがもしグレンシャムに足を踏み入れたら死んでもらうと脅しているから、死者が出なかったのは偶然の結果なのかもしれない。

この請願に関してヘンリ 6 世はノーフォーク州奉行ジョン・ジャーミンに「マリNZ卿を無罪にできる陪審員を選ぶように」との書簡を送り、ジャーミンはマリNZ卿だけでなくその配下の者たちにもそう取り計らうとギルバード・デブナムたちに伝えたという (*Paston* II. 71)。翌年国王は新しい州奉行ジョン・クロプトンに使者を介して「マリNZ卿に親しく接

するよう」要請する (*Paston II*. 79-80)。「国王の平和」を乱して悪事を働く者を処罰せねば悪を一層はびこらせ、国王の臣下を破滅させることになるとのジョン・パストンの請願は、ランカスタ派であったマリNZ卿を無罪にせよとの国王のこゝろを引き出す結果となった。

ウィリアム・パストンのアスラク非難文書と比較すると、文書の性格もまったく異なるが、ジョン・パストンの請願書の問題点が明らかになってくる。1月28日の暴力事件については、集団の服装、武具、工具、建造物破壊、掠奪、脅迫言辞など詳細をきわめた叙述がなされている。しかし本来の不法行為はその前年2月17日の侵入であり、その際のマリNZ卿およびその配下の行動と発言はどのようなものであったのか。請願は次のように始まっている。

To the Kyng oure Souerayn Lord, and to the right wyse and discrete lordis assembly in this present Parlement

Besechith mekly your homble liege man John Paston that, where he and oder enfeffed to his vse haue be pecybily poscessyd of the maner of Gresham within the Counté of Norffolk xx yere and more til the xvij day of Februarij the yere of your nobill regne xxvj, that Robert Hungerford, knyght, the Lord Molyns, entred in-to the seyde maner.

(*Paston I*. 51)

マリNZ卿の不法行為は、20年以上にわたり「封譲渡された」土地に「侵入」したと記述すれば、それで十分表現されるのであろうが、この「侵入」が「暴力的侵入」であったのか、それとも暴力を伴わない「侵入」であったのかも判然としない。1月28日の詳細さとは比較にならない。1月28日に関しては、マーガレット・パストンと12人の目撃者があり(1000人という襲撃者の数には恐怖と憤怒による過大報告も感じられなくはない)、また襲撃直前の緊迫した状況についても証言がある。パストン家の礼拝堂司祭ジェイムズ・グロイスは11月22日付のジョン・パストン宛書簡でその頃の様子を伝えている。

... and there-fore my mastres dede vs don on owre jakkys and owre salettys. My Master Berney cam in and the parson of Oxened with hym, and sey vs in owre jakkys; and he waxe as pale as any herd and wold right fayn a ben thens.

(*Paston* II. 28)

防御上衣にヘルメットという臨戦態勢にあるグロイスたちを見て、マーガレットの従兄ジョン・バーニーはたちまち顔面蒼白になり、すぐにでも帰りたい様になる。マーガレットはそれを引き留めて食事を共にするのだが、そこでも物騒な話ばかりなので、食事後急いでバーニーは帰ろうとし、また来るようマーガレットに頼まれると、できるだけと言ってあわてて帰ってしまう。その約1週間後ジョン・ダムは、パストン家に敵対するサイモン・ガナーの発言とそれに対するマーガレットの返答をジョン・パストンに伝えている。

... and after eueson Gunore spak to my maisteresse pat she shuld make here men to leue here wyfeles and here jackes; and she ansuered pat thei purposed to hurte noman of here owyn sykyng, but for it was seid that she shuld be plukkyd out of here howse, she were loth to suffre pat, and ther-fore she seyde thei shuld goo soo til ye come hom. (*Paston* II. 30)

斧も防御上衣も止むを得ぬ自衛手段なのである。そしてダムはロンドンのイナー・テムプル法学院にいるジョン・パストンも用心のため革の防御上衣を注文するよう助言する。

マーガレットからジョンに宛てた書簡はもっと直截で、冒頭からすぐ用件に入る。

Ryt wurchipful hwsbond, I recomawnd me to 3u and prey 3w to gete som crosse bowis, and wyndacis to bynd pem wyth, and quarell, for 3wr hwsis here ben so low pat pere may non man schete owt wyth no long bowe pow we hadde neuer so moche nede. I sopose 3e xuld haue seche thyngis of Sere Jon Fastolf if 3e wold send to hym. And

also I wold 3e xuld gete ij or iij schort pelle-axis to kepe wyth doris,
and als many jakkys and 3e may. (*Paston* I. 226)

このような武器や防具の緊急配備要請は、マリNZ卿側の防衛強化と連動している。ジョン・パストンが戻ってくることを警戒して、彼らは扉に筋交いを入れたり、弓と小銃とのためにそれぞれ狭間を東西南北に設置した。小銃用の穴は膝の高さに5箇所作られ、小銃以外には小型弓も使えない、などの情報がマーガレットに届いていた。

1月28日の襲撃を記述した書簡は見当らないから、口頭で報告されたか、その報告に限っては焼却されたのであろう。他方、当初の侵入から10月のグresham再定住に至るまでの小暴力事件もジョン・パストンに報告されている(*Paston* I. 224-5)。1448年5月中旬金曜の午前中ノリッジで、ジェイムズ・グロイスはジョン・ウィンダム邸の前をふたりの従者と共に通過した。邸の門前にはウィンダムとその使用人ジョン・ノーウッドが立ち、もうひとりの使用人トマス・ホーズは道路にいる。グロイスの帽子をめぐって「てめえ」呼ばわりの乱暴なことばが交わされ、ウィンダムは短剣を取り出してグロイスを追いかけ、グロイスも短剣で応戦しながらアグネス・パストン邸に逃げ込んだ。ウィンダムたちは投石を始め、ホーズに至ってはアグネス邸敷地にまで入り込んで、大きなパンの塊ほどの石を邸宅に投げつけた。グロイスがホーズを追いかけて外に出ると、ウィンダムは彼に対し「泥棒、死ね」と喚き、彼は「嘘つき野郎、かかってくるなら一対一で勝負してやる」と言い返す。するとホーズは邸から槍と剣を持ち出した。その凄まじい騒ぎで、教区教会堂の聖体拝受に臨んでいたアグネスとマーガレットは外に出てグロイスを邸内に戻したのだが、ウィンダムはこのふたりの女性を「売春婦」と罵った。午後になってノリッジ小修道院長にこの件を訴えたが、その帰途、グロイスと使用人トマスはふたたびホーズに剣で襲撃され、トマスは軽傷を負う。マーガレットは、グロイスがロンドンでジョンに仕えるよう手配するが、ウィンダムは近くロンド

ンに行くそうなので、出歩く時にはふたりとも十分注意が必要になる。ウィンダムは卑劣な人間だから何をするか分からない。デイヴィスによれば、ウィンダムはマリNZ卿を唆したヘイドンやタダナムの仲間で国会議員の経歴もある顔役であった (Davis 10)。

こうした事態が生じているにもかかわらず 10 月 6 日にパストン側がグレシヤムに住居を構え、ジョンはまもなく所用でロンドンに出るものの、マーガレットと 12 人の関係者を残し、武器と防具を整備したのは、マリNZ卿に対するパストン側からの挑発とも考えられる。そしてパストン側にとって最も非難的としやすい、大集団による暴力を伴う不法侵入へとマリNZ卿を誘いこんだともいえよう。

ウィリアム・パストンのアスラク非難は、暴力を伴わない言語上の不法行為を追求するために、アスラク側が引用したグライス殺人事件をまず詳細に記述して、言語による威嚇を殺人事件と並置してみせた。彼がこの殺人事件についてどの程度の情報を持っていたのか、またアスラク側の引用がどの程度のものではあったのかは明らかではないが、ウィリアムの筆力はグライス事件の残忍さ、不条理性を見事に表現している。

ジョン・パストンの請願書は、不法侵入、占拠という事態の表現としては必ずしも十分と言えないが、マリNZ卿の暴力行使を請願書の中心に据え、それ以前から存在していたかもしれぬ事態 (乱暴者たちが毎日グレシヤム荘園を暴力によって支配している、など) が 1 月の襲撃以降初めて発生したかのように書き、このように「国王の平和」を乱す者が処罰されぬのであれば、大きな問題となろうと結んでいる。ジョンは法律を駆使して我が身を守るために、かなり危い橋を渡って有利な状況を作り出したように思われる。実際、彼はその後何回も投獄される憂き目にあった。

☆

『パストン家書簡集』には、パストン家と直接には関係のない暴力事件も記述されている。1455 年 10 月 28 日、パストン家の紳士身分の使用人ジェームズ・グレシヤムは、ジョン・パストンにロンドンで入手した最新

情報のひとつとして、デヴォンシア伯の嫡子トマス・コートニー（1432-1461）が伯の仇敵ボンヴィル卿の知人ニコラス・ラドフォドの邸を襲撃したことを伝えている。

Also þer is gret varyance by-twene þe Erll of Deuenshire and þe Lord Bonvyle, as hath be many day, and meche debat is like to growe perby; for on Thursday at nyght last passed þe Erll of Denshyres sone and heire come wyth lx men of armes to Radfordes place in Deuenshire, whiche was of counseil wyth þe Lord Bonvyle, and they sette an hous on fyer at Radfordes gate and cryed and mad an noyse as though they had be sory for þe fyer. And by that cause Radfordes men set opyn þe gates and yede owt to se the fyere; and forwyth th'Erll sone forseid entred into þe place and intreted Radford to come doun of his chambre to speke wyth them, promyttyng hym that he shuld no bodyly harm have; up-on whiche promysse he come doun and spak wyth þe seid Erll sone. (*Paston* II. 126)

60 人もの武装集団が夜間に訪れ、門扉が放火される事態は平常からはど遠い。それなのに「身体の安全は保障する」とコートニーは約束する。ところが彼の手下たちはラドフォドの邸内を荒し持ち去ることができる物品はすべてラドフォドの馬に載せて運び出してしまった。コートニーは「貴様には親父のところに来てもらおう」と言い、ラドフォドは高齢なので馬上でならばと使用人に馬を引かせようとするが、馬はすべて掠奪されて1頭も残っておらず、徒歩でコートニーたちの馬に従いて行く羽目になった。

... and so he dede till he was a flyte shote or more from his place, and panne he was <...> softly for cawse he myght not go fast. And whanne þei were thus departid he turned <...> anoon forwyth come ix men ageyn up-on hym and smot hym in þe hed and fellid <...> oon of them kyt his throte.

(*Paston* II. 127)

この書簡は残念ながら後半に欠損があつて明快さを欠くが、矢の飛距離ほどの夜道を老人に歩かせた挙句、9 人がかりで襲いのどを搔切つて殺し

たという事実は読みとれる。コートニーとボンヴィルの対立に巻きこまれた法律家ラドフォドの姿は、ジョン・パストンにとって他人事とは思えなかったに違いない。

コートニーとボンヴィルはやがてバラ戦争の中でそれぞれの死を迎えることになる (Keen 200)。それはヨーク家側に加担したジョン・パストンにとっても生命の危機となりうるものであった。マーガレットは 1461 年 3 月、夫に警告する。

... per is leid awayte up-on you in pis cuntré yf ye come here at large,
to bryng you to þe presence of suyche a lord in the north as shall not
be for your ease, but to iopardie of your lyf or gret and importable
losse of your goodes. (*Paston* I. 264)

☆

暴力による支配は、この時代にあっても、法による支配を出し抜こうとした。しかもその支配は立法者階級と言うべき社会的地位の上部から下部に対して行なわれた。とりわけ暴力に抵抗する効果的な手段を持たぬ者に対しては、残忍で冷酷な暴力が向けられた。残念ながらそうした暴力の一端は家庭内にもあった。ウィリアム・パストンの娘エリザベスは 20 歳頃、母アグネスが準備した結婚を拒否する。親が考える良縁の基準は収入と家柄であり、最初の候補者はその時すでに 50 歳であった (*Paston* I. lvi)。すでに結婚した娘までいるこの候補者に同意しなかったエリザベスは、ひどい虐待を受けることになった。それを見兼ねた親戚のエリザベス・クレアはジョン・パストンに手紙で惨状を伝える。

... sche was neuer in so gret sorow as sche is now-a-dayes; for sche
may not speke wyth no man, ho so euer come, ne not may se ne
speke wyth my man ne wyth seruantes of hir moderys but þat sche
bereth hire an hand operwyse þan she menyth. And sche hath son
Esterne þe most part be betyn onys in þe weke or twyes, and som
tyme twyes on o day, and hir hed broken in to or thre places. (*Paston*
II. 32)

ひどい場合には1日に2回も鞭で打って頭部に傷ができるほどの暴力を行使しているのがだれなのか、クレア夫人は明言しないが、暗示はしている。

Cosyn, I prey 3ow brenne þis letter, þat 3oure men ne non oper
man se it, for and my cosyn 3owre moder knew þat I had sent yow
þis letter sche schuld neuer love me.

(*Paston* II. 32-33)

末子クレメントの教育に関して、ケンブリッジ在学時代と同じくロンドンでも、仮借なく鞭を使うようにとアグネスは書いており (*Paston* I. 41) エリザベスに対する虐待も彼女によるものと考えられよう。ここでも暴力は支配関係と結びついている。

マーガレット・パストンとその娘マージョリーの場合、父親が歿したあとの結婚という点ではアグネスとエリザベスの場合と同じだが、事情はもっと込み入っている。ケイスター城をめぐる騒動のさなかにマージョリーは、「パストン家の管財人であり、使用人たちの監督者、家令、そして金庫係」(社本 141)のリチャード・コールと結婚の誓約をしたと言い出す。この時代には、司教の同意を得て教会で祝福を受ける方式とは別に、当事者の合意による結婚も認められていた(社本 135)。ノリッジの司教が審問をして最終的にこの結婚は成立するが、収入も家柄も身分も低い男性との結婚は家門の恥とも呼ぶべきものであり(パストン家が結婚によって所領を増大させてきたことも忘れられない)、ジョン・パストン2世は手荒な手段も考えたらしい。マーガレットは娘の選択に怒り、落胆し、悲しみながらも、「離別」という表現の含意に対し強いことばで警告する。彼女の判断基準は「神」と「良心」なのである。

As fore þe devors þat 3e wrete to me of, I suppose wat 3e ment, but I
scharge 3ow vpon my blyssyng þat 3e do not, nere cause non othere
to do, þat xuld offend God and 3owr conschens; fore and 3e do, ore
cause fore to be do, God wul take vengawns there-vpon and 3e xuld

put 3owr-sylfe and othere in gret joparté. (*Paston* I. 343)

それでもジョン2世はクリスマスまで結婚を引き延ばしてもらえないかと返信を書く。

I hope by that tyme to fynde som remedye therffore;

(*Paston* I. 409)

ここでは父亡き後の家長となったジョン2世が妹に対する支配者であり、宮廷人で浪費家、あらゆる紛争を策略で解決しようとする彼でさえ、マーガレットがまさに血相を変えて断念を迫る類の手段を講じようとするのである。

☆

サー・ジョン・ファストルフの遺産をめぐる遺言執行人としては異例の膨大な遺贈をほとんど独占的に受けたために生じた混乱の中で、法による支配をめざしてきたジョン・パストンは1466年5月ロンドンで死去する。1469年ノーフォク公ジョン・ド・モーブレイ(1444-1476)は、以前から触手を伸ばし何回か占拠したこともあるケイスター城(かつてのファストルフの居城)の所有権を主張し、パストン家と交渉を続けていたが、明け渡しに応じないパストン側に対して8月下旬ついにケイスター城を包囲した(*Paston* I. lx)。ノーフォクの軍勢は約3000人であった(Trevelyan 126)。

従来このような場合のパストン家の戦略は、暴力に対しては抵抗せず、時間がかかっても法による解決を求めるのが常であった。1465年10月14日やはりファストルフの遺産であったヘリズドンに対しサフォク公ジョン・ド・ラ・ポウル(1442-1491)がその所有権を主張して攻撃を始め、3日間にわたってヘリズドンを徹底的に破壊し掠奪の限りを尽くした後で(Barber 126)ノリッジ市庁舎に500人の軍勢を率いて現われパストンとその支持者の処罰を要求した時にも、法による解決を探ってきた(*Paston* I. 323-324)。ケイスターに関しては、ジョン2世が人脈を利用してノー

フォク公に占拠を断念させる道を探る一方で、弟のジョン3世を指揮官とする抵抗部隊をケイスターに配置していた。しかし9月12日マーガレットはジョン2世にケイスターの窮状を訴える。

I grete you wele, letyng you wete that your brothere and his felesshep stond in grete joparté at Cayster and lakke vetayll; and Dawbeney and Berney be dedde and diuerse othere gretly hurt, and thei fayll gonnepowder and arrowes, and the place sore brokyn wyth gonnnes of pe toder parte; so that, but thei haue hasty help, thei be like to lese bothe there lyfes and the place, to the grettest rebuke to you that euer came to any jentilman, for euery man in this countré marvaylleth gretly that ye suffre them to be so longe in so gret joparté wyth-ought help or othere remedy.

(*Paston I.* 344)

グレシャム事件の際にマーガレットは襲撃に備えて軍備の増強を夫に要請したが、ここでは現実に行進している戦闘への援助であるだけに高度の緊迫感がある。彼女の脳裡にあるのは戦闘の続行と勝利なのだが、妥協的な撤退の道も考慮しているらしい。オズバーン・バーニーについては後になって誤報と判明 (Davis 184) するが、ジョン・ドーブニーは戦死した。ジョン3世は9月25日に降伏し (*Paston I.* 546)、ノーフォク公はカンタベリ大司教トマス・バウチャー、クラレンス公ジョージその他の要請を受け、ジョン3世たちに安全通行証を発行した (*Paston II.* 431-432)。

1470年2月頃からジョン2世は、元大法官、ウィンチェスタ司教ウィリアム・ウェインフリートとの間で、サー・ジョン・ファストルフの遺志が生かされぬまま紛争によって遺産が浪費され破壊されている現状に鑑み、ファストルフ遺言状の見直しについて話し合いを重ね、1470年7月14日に同意書を交わした。ケイスター、ヘリズドン、ドレイトンなどを除いたその他のファストルフ遺産はクリスマスまでにウィンチェスタ司教に引き渡され、ケイスターなど他者が占拠している物件については、その正当な所有者パストンに引き渡されるよう司教が努めることになった。司

教はファストルフの遺言執行人のひとりであったが、ケイスターに設立されるよう指定された修道院を 1458 年彼が創設したモードリン学寮（オクスフォード）に移そうと考え、カンタベリ大司教の承認を得てこの同意書を成立させたのである（*Paston I.* 419-426）。

1470 年 10 月 13 日ヘンリ 6 世が復位すると、ヨーク派のノーフォク公は 12 月にケイスターを明け渡したが、翌年 5 月エドワード 4 世が復位すると 6 月に再度占拠した（*Paston I.* lxx）。

エドワード 4 世御世第 15 年（1476 年）1 月ノーフォク公が 32 歳で急死した際、ジョン 2 世はすばやく国王評議会にケイスターの所有権確認を求め承認を得た（*Paston I.* l）。武力によって守り得なかったケイスターは武力によらずパストン家の財産となったのである。「法は我が身を守る」というウィリアム・パストンの遺訓は、紆余曲折を経ながらも、パストン家を守ったといえよう。

引用文献（〔 〕内は略称）

- Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*, ed. Norman Davis, 2 vols., Oxford: Clarendon P., 1971 & 1976. [Paston]
The Paston Letters: A Selection in Modern Spelling, ed. Norman Davis, Oxford: Oxford UP, 1983. [Davis]
The Pastons: A Family in the Wars of the Roses, ed. Richard Barber, Woodbridge: The Boydell P., 2004. [Barber]
 Keen, Maurice, *English Society in the Later Middle Ages 1348-1500*, Harmondsworth: Penguin Books, 1990. [Keen]
 Myers, A.R., *England in the Late Middle Ages*, Harmondsworth: Penguin Books, 1966. [Myers]
 Trevelyan, G.M., *Illustrated English Social History*, Vol.1, Harmondsworth: Penguin Books, 1964. [Trevelyan]
 『英米法辞典』、田中英夫他編、東京、東京大学出版会、1991。[田中]
 『英米史辞典』、松村赳・富田虎男編著、東京、研究社、2000。[松村・富田]
 社本時子、『中世イギリスに生きたパストン家の女性たち—同家書簡集から』、大阪、創元社、1999。[社本]

貴族と聖職者の詳細については下記を参照した。

Dictionary of National Biography, 22 vols., Oxford: Oxford UP.

Handbook of British Chronology, ed. E. B. Fryde et al., London: Royal Historical Society, 1986.

(本稿の入力には文化女子大学講師小川好子氏のご厚意を頂戴した。御礼を申し上げます。)